

Title	古墳時代の埋葬原理と親族構造
Author(s)	清家, 章
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/49114">http://hdl.handle.net/11094/49114</a>
DOI	
rights	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

氏名	せい け あきら 清 家 章
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 2 2 3 0 9 号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	<b>古墳時代の埋葬原理と親族構造</b>
論文審査委員	(主査) 教授 福永 伸哉 (副査) 教授 梅村 喬 准教授 高橋 照彦

### 論 文 内 容 の 要 旨

3世紀半ばから7世紀まで続いた古墳時代に日本列島で築造された古墳の数は30万基をこえる。日本の考古学は、膨大な数の古墳を詳細に比較検討することによってこの時代の社会関係、政治関係、地域関係を解明する方法を進展させてきた。本論文は、こうした厚い研究蓄積のある分野において、埋葬人骨の形質人類学的分析と埋葬施設・副葬品の考古学的分析を結合させる新しい方法を用いて被葬者間の親族関係を復元し、古墳時代の埋葬原理、地位継承原理、親族構造の特質を解明した意欲作である。全体は5章からなる本論部分に序章、終章を加えた構成で、分量は400字詰原稿用紙換算約800枚である。

研究の目的と課題を述べた序章に続いて、第I章では埋葬人骨の「歯冠計測値」と「頭蓋小変異」を指標とした形質人類学的分析によって中小古墳に葬られた家長層の親族関係を検討し、古墳時代を通じてキョウダイが同じ古墳に埋葬される原理（「キョウダイ原理」）が認められると指摘する。そして、古墳時代前期・中期には古墳築造の契機となった初葬者の性別比に大きな差はなく双系的な家長位の継承が考えられること、後期には男性初葬の比率が増して父系的な地位継承に傾くものの父系化はなお貫徹していないことなど、注目すべき理解を提示した。

こうした理解をさらに検証するために、第II章では副葬品の種類や配置から被葬者の性別を判定する考古学的方法を用いて、人骨が遺存しない古墳も含めて広く事例を分析した。その結果、同じ古墳に同性の被葬者が複数埋葬される例が一般的であることから、やはりキョウダイ原理の埋葬が卓越していることを説得的に明示した。

第III章では、前方後円墳をおもな分析対象として首長墳被葬者の親族関係を検討し、複数の同性被葬者が同じ古墳に埋葬された例が多いことから、首長層においても家長層と同様にキョウダイ原理の埋葬が基本であったという結論を導く。文献史料ではこの時代に一部の大王と渡来系集団において夫婦原理の埋葬事例が知られているが、発掘資料による限りそれらは例外的なあり方に過ぎないとした。

第IV章では、首長位継承における性別差の分析へと論を進める。前期には前方後円墳の中心埋葬において女性人骨が確認されているが、その骨盤に「妊娠痕」が認められる点に注目し、これら女性首長が臨時的・例外的な存在ではなく、後継者を出産できる一般的な存在であったと理解した。また、中期以降には首長墳の初葬者が男性に限定されるようになることから、埋葬におけるキョウダイ原理は維持されるものの、地位継承としては家長層にやや先んじて父系優位への変化が生じたことを指摘した。

第V章では埋葬原理と地位継承原理の推移を時系列で整理し、古墳時代にはキョウダイ原理の埋葬を基本としつつも、地位継承の父系化は中期に首長層から始まり、後期には家長層でも父系に傾くという二つの変化期があったと

らえた。そして、その変化の主因を東アジア情勢と関連した列島内の軍事的緊張や軍事編成の顕在化に求めた。

以上の考察を総括した終章では、古墳時代には首長・家長層の軍事的役割の増大を受けて、地位継承の父系化が上位階層から進展したが、埋葬におけるキョウダイ原理の根強さが示すように父系化はついに貫徹せず、前代以来の双系的な親族構造を基調とする社会であったと評価し、文献史研究における「古代双系的社会説」への整合的な展望を示した。

## 論文審査の結果の要旨

文献史料の乏しい時代の社会構造を解明することは考古学の重要な役割であり、墳墓研究はその有効な手がかりとなる。しかし、墳墓の大小から階層差を明らかにすることは容易であっても、親族構造のような水平的な人間関係を考古資料からとらえることは、とりわけ困難な研究テーマに属する。本論文は、形質人類学的分析を取り入れて資料的限界をうち破り、埋葬原理という切り口で古墳時代の地位継承や親族構造の特質を解明した点で、このテーマにおける最先端の研究として高く評価できるものである。

歯冠計測値や頭蓋小変異に着目する研究法自体は、日本では田中良之氏らが九州地方の資料を対象として1990年代に先鞭をつけたものであるが、清家氏は分析範囲を中四国・近畿地方に広げるとともに、妊娠痕という指標を新たに加え、さらに埋葬施設構造・副葬品組成といった考古学的な分析と結合させて、独自のアプローチを開拓した。とりわけ、人骨遺存例から導き出した副葬品組成と性別の関係性を武器に、人骨が腐朽消滅した多数の埋葬の性別を判定し、古墳時代を通じてキョウダイ原理の埋葬が基調であったことを指摘した点は、そうしたアプローチの有効性を如実に示すものであろう。中期後半以降に父子原理や夫婦原理の埋葬が卓越する父系社会へと明確に転換していくと説く田中氏とは、明らかに異なる結論に到達しており、今後の論争の展開が大いに期待されるところである。

また、双系的な親族構造を基調とする古墳時代にあつて、地位継承の父系化が上位階層から徐々に浸透してくる動きを指摘し、それが氏族共同体の解体という内的要因ではなく、東アジアの軍事的緊張状態のなかで男性首長・家長の役割が増大するという外的圧力によって促進された点に、文明国周辺における「二次的国家形成」の特質をみる理解も、大きな問題提起として特筆できるであろう。

もともと、本論文にも改善すべき点がないわけではない。たとえば、埋葬原理、地位継承原理、親族構造という次元のやや異なる問題が時に混然として議論されていること、東日本を対象とした分析や展望が不十分であること、古代親族構造にかんする文献史研究の幅広い議論への目配りがさらに望まれることなどは、今後に残された課題である。

とはいえ、日本考古学の長所である良質の遺構・遺物研究と、形質人類学的な研究を効果的に結合させて、古墳時代社会構造の解明に新たな見通しを示した本論文は、今後の研究の潮流に大きな影響を与える意欲作といえる。よって、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしい価値を有するものと認定する。